

《特別講演記録》

2014年度 第1回グローバルセミナー 「海外で仕事をするということ」

ニューヨークヤンキース球団通訳
堀江慎吾

2015年1月7日（水）、語学教育研究所主催による第1回グローバルセミナー（協力：スポーツビジネス研究所、駒木学習センター）が、江戸川大学（会場：D棟351教室）において開催された。

このセミナーは、グローバル社会で活躍する方を招き、リアルな仕事の現場や国際社会の現状、異文化におけるコミュニケーションのあり方を伝えていただくと同時に、特に学生を対象に、キャリアプランニング、将来必要となる学習ならびに国際社会のとらえ方などを含め、これからの指針の一助となるよう企図されたものである。さらには、グローバル社会を実感し、どのようにしたら国際的な視野を得られるか、今後求められるコミュニケーションのあり方を検討することも目的のひとつである。

ニューヨーク・ヤンキース球団の田中将大投手の専属通訳である堀江慎吾氏に講師をお願いした。田中将大投手は、前年ニューヨーク・ヤンキースと契約が成立する直前に、本学に来校し講演されていたので、ニューヨークにおける田中投手の活躍ぶりも伺えるのではないかという期待もあり、第1回に相応しい講師をお迎えすることができた。

以下は、セミナー内容を記録したものをまとめたものである。

1. 日本とアメリカでの生活

私は、今年で40歳を迎えますが、これまでを振り返ってみると、日本に17年、アメリカでは23年を過ごしたことになります。これは、私の父親の仕事の関係で日本とアメリカとを行ったり来たりしていて、連続で居住していたというわけではありません。まず初めてアメリカに住んだのは5歳のときで、10歳までシカゴに住みました。私の英語力のベースは、このあたりで作られたようです。その後、日本に帰国し中学2年まで日本の学校に通いました。さらに、高校は、当時バイリンガル育成目的でニューヨークに創設されたばかりの慶應ニューヨーク学院に3年間通い、その後日本に戻り慶應義塾大学で4年間の大学生活を送りました。こうして見ると、7年から8年毎に、日本とアメリカを往来し、転校ばかりしていたので、当時の私はそれがとても嫌でしたが、今とな

れば、逆に私の人生にとっては良かったと思っています。私は、もともとスポーツが大好きで、学生時代はホッケー、バスケット・ボール、水泳などに興じていました。

さて、大学卒業後、日本の企業に就職したのですが、私はすぐにでも海外で仕事がしたいと思っていました。しかし、当時の日本の企業では、5年くらいの下積み経験をしないと海外赴任のチャンスがなく、海外に飛び出したい気持ちを抑えきれずに会社を辞め、グリーンカードを持っていたことでロスアンジェルスに旅立ってしまいました。このときを思い返すと、無謀と言ってくらいの無計画で、全財産は60万か70万円くらいしかなかったと思います。アメリカは車社会なので、動き回するには車が必要です。ですから約2,000ドルをはたいて中古車を購入しましたが、数週間もするとすぐにその車が故障。その修理に、さらに車購入代金と同じくらいのお金が必要だと言うのです。仕方なく大枚はたいて修理に出すも再び故障とい

う次第で、持ち金がなくなるという事態になってしまいました。そこで仕方なく再び日本に戻り、アルバイトで60万ほど貯めると再び渡米したわけです。このとき、前回の失敗を胸に刻み仕切り直し、満を持して仕事を探しました。

私は、スポーツがたいへん好きでしたが、また一方でドキュメンタリーもたいへん好きでした。学生時代は、よく好んでドキュメンタリー番組などを見ていました。そうしたことも手伝って、バスケットなど大リーグのスポーツを密着取材をしたいと思うようになりました。日本のTV局がアメリカで番組を作る際、制作サポートを2年程務め、フリーランスとして働いていました。この頃から、野茂、松井、イチローなどの選手が日本から大リーグにやって来るようになり、彼らの取材、番組制作などに携わる仕事のオファーがありこれを4,5年やらせて頂きました。NHK-BSの中継スタッフとして2009年から2013年の5年間、ディレクターを含む制作業務に携わりました。その後、田中将大投手がニューヨーク・ヤンキースに入団決定した2014年に、専属通訳になり現在につながっています。

20代で無計画に海外に出た私ですが、振り返ってみると恵まれていたと思います。「アメリカで仕事がしたい」「スポーツが好き」といった、必ずしも明確な目的があったわけでもないのですが、ぼんやりした願望でも、そうした気持ちを持ち続けることで実現に近づけることができる。その中で、出会った人、困っているときに助けてくれた人がいます。そうした人脈があったことが幸いしたと思います。ですから、みなさんも出会った人、助けてくれた人を大切にしてください。

2. ニューヨーク・ヤンキース球団での通訳としての体験と経験

ニューヨーク・ヤンキースは、1901年に創設され、27回優勝、優勝回数第1位を誇る(因みに優勝回数第2位は、セントルイスの11回)。野球ファンでなくとも著名なベーブ・ルース、ジョー・デマジオ、日本の松井選手などがメンバーでした

ので、皆さんよくご存じだと思います。私の初仕事は、田中将大選手の入団会見で、200以上のメディアが集まったため、通常の記者会見の場所では入りきらず、他の広い場所に移し会見が行われました。中央には、田中投手、監督、球団社長、副社長、ゼネラルマネージャーなどが居並び、とても緊張したのを覚えています。その緊張の中、何とかミスもなく会見を終えほっとしました。

キャンプに入ると、監督・コーチ・チームメイトとのコミュニケーション、指示の伝達といったチーム内の通訳の仕事が主です。チーム内ではありませんが、ファンとのふれあいのようなイベントにも携わります。一番気を使うのは、メディアへの対応です。田中投手のことばとして新聞などでは私のことばが出るわけですから、慎重にならなければなりません。通訳をしていて難しいと思うのは、日本語のことばに対する英語の適切な表現が見つからないときです。こうした場合、逐語訳をしても必ずしも真意が伝わるとは限りません。ですから、内容を大きくつかんでニュアンスを伝えるように努めています。

大リーグの試合が行われている間は、かなりハードなスケジュールで動きます。6か月の間に162試合をこなし、この間に20日間がお休み、1か月に3日程度の休みしかありませんので、強靭な体力が必要とされます。また、7から10日ホーム、7から10日アウェイという間隔で広いアメリカ全土を飛び回り、時差ボケなどにも悩まされますので、個人の体調管理が強く求められます。私自身は、アメリカを母国とは思っていませんが、空気というか雰囲気というか、私にとっては住みやすいところだと思っています。

ヤンキースには、ドミニカ、ベネズエラ、パナマ、プエルトリコ、台湾などから選手が来ているので、スペイン語、中国語、日本語など英語以外のことばがクラブハウスでは聞こえます。そうした中では、お互いの言語を教え合うようなことがあり、わきあいあいとしたムードになります。音声が目白らしく、たとえば日本語の「もしもし」という音声をよく選手たちがまねていたりします。様々な国籍から成り立つ球団ですが、結束力と団

結力がすばらしい。名門の球団ですから、やはり「優勝」という目的に向かって団結し、各々の仕事の責任を果たすということでしょうか。

田中将大投手のトロントでの初戦の際ですが、ピッチング練習をしているとき、まわりの相手チームのファンが罵声を飛ばし、かなりうるさかった。傍らで練習する田中投手に話しても声が届かないほどでした。この日、早い段階でホームランを打たれてしまい、大丈夫だろうかと思いましたが、田中投手はこの後持ち直して抑えてゆきました。ランナーを塁に出してしまうのですが、粘り強く最終的にはしっかり抑えて勝利につなげてゆくを見て、田中投手の集中力と持ち直す力はすばらしいと思いました。6勝を挙げた後、メッツとの試合で完投し勝利投手になったときの会見では、ここまでうまくいくと思っていたかという質問に対して、田中投手は「周囲の方はここまで期待していなかったと思うが、（自分を信じて）やるだけのことをやる」と答えました。こうした発言からも、ことば少なですが、闘志を内に秘めているということがわかるのではないのでしょうか。

その後、怪我により試合から遠ざかります。幸い手術を受けず治療とリハビリを行います。オールスターに出ることが叶わず、本人は非常に残念がっていたと思います。

田中投手はとても賢く、語学センスがあります。シーズンが終わるころには、聴解力がもともとあるので、英語の音声に耳になれ、ほとんどの内容理解ができています。また、ジェスチャーをまじえながらコミュニケーションを取ろうと努めており、めきめきと語学力が上達しているようです。あまり上達しすぎてしまうと、私が失職してしまいますので、困ってしまいますが。(笑い)

3. 質問に答えて

①問 「海外に出て仕事をするもののプラス面は
どのようなものがありますか」

—堀江— そうですね、海外はどこでもよいと思いますが、新しい経験、未知の体験ができるということ。日本では味わえない体験や経験

は、自分の世界を広げてくれると思います。また、世界から日本を見るということが大切なのではないのでしょうか。そうしたことも、視野を広げる、自分の世界を広げるということにつながってゆくと思います。

②問 「英語で話したいと思っていますが、効果的な英語学習方法にはどのようなものがありますか」

—堀江— まず英語音声にふれること。第一に、ことばは耳から入ってきます。聴解力をまず鍛える。次に、英語の上手な人のまねをしてみる。(できれば英語を母語とする人が望ましいです。) 子供は親の言っていることばをまねて話すことを学習してゆきますよね。ですから、テレビやラジオを利用して、特に口の動きなどを観察しながらまねて言うことからはめるとよいと思います。

③問 「実際に体験することの重要性を強調されていましたが、実体験によって得られるものとは何ですか」

—堀江— バーチャル体験とは異なり、実体にふれ、空気にふれ、人間の五感を持って体験することが一番自分に残ると思います。そうした事柄は、自信を持って語れるようになると思います。

④問 「日本は島国なので、以心伝心のような意識を前提としホンネを言わないのは日本の国民性と言われることがあります。日本人の国民性についてどうお考えですか。」

—堀江— 日本は、ホンネを言わなくても察するのを尊ぶことがあります。アメリカなどでは、逆に自分の意見を言わないと相手にしてもらえない、物足りないと感じます。

⑤問 「堀江さんはご自身のチャレンジ精神についてどうお考えですか。」

—堀江— スポーツ好きですが、特に野球をしていただけではありません。せいぜい草野球程度です。チャレンジ精神というより、スポーツに関係する世界に携われたらという願望があり、日本選手がアメリカで活躍しているのが野球の世界が環境としてあったからです。